

鹿角市の財務諸表 (概要版)

～令和5年度決算～



きりたんぼ発祥の地・鹿角 イメージキャラクター たんぼ小町ちゃん

鹿角市財政課

1. 地方公会計制度の概要と本市の取り組み

平成18年6月に成立した「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律」(行政改革推進法)を契機に、地方の資産・債務改革の一環として「新地方公会計制度の整備」が位置づけられました。

本市においても、平成20年度決算から「総務省方式改訂モデル」により財務書類4表の作成を行ってきました。この財務書類4表とは、発生主義・複式簿記の考え方に基づいた、貸借対照表(バランスシート)、行政コスト計算書(損益計算書)、純資産変動計算書、資金収支計算書(キャッシュ・フロー計算書)の4表です。これまでの単年度予算主義による現金主義及び単式簿記では把握しきれなかった、資産・負債等の「ストック情報」や行政サービスを提供するために発生する費用の「コスト情報」等が、この財務書類4表を作成することで把握できるようになっています。

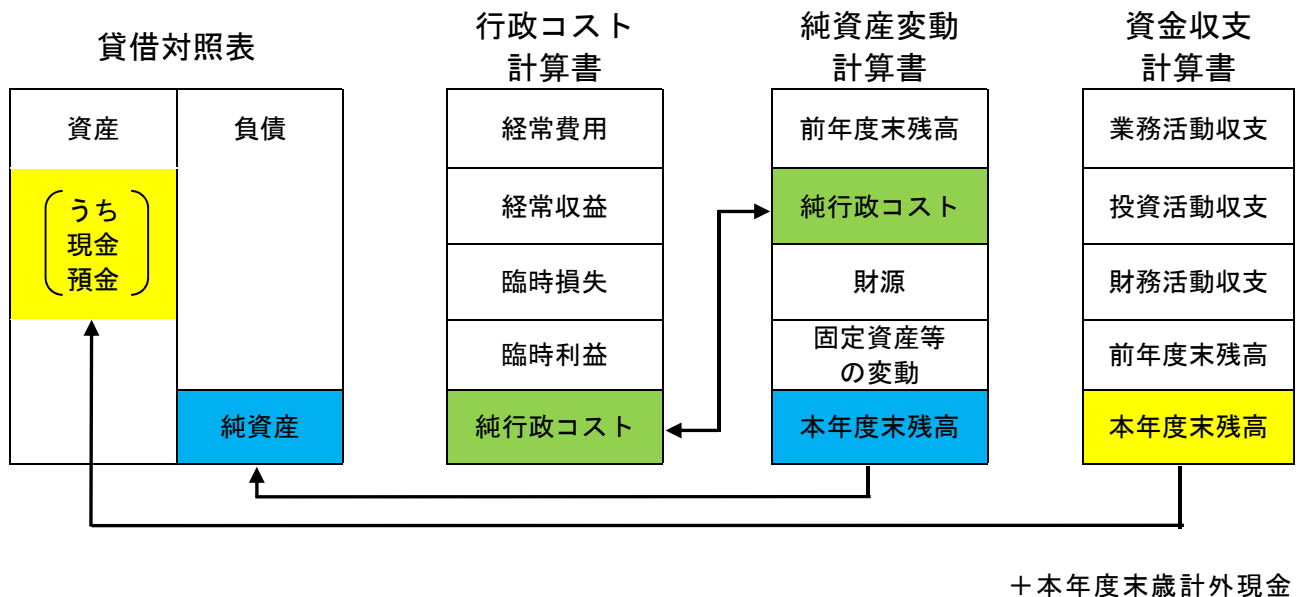
また、一般会計に公営事業会計や第三セクター等を加えた全体・連結財務書類を作成しており、本市に係る全体の財政構造やそれらの健全性についての把握も行っております。

平成28年度決算からは、国の「統一的な基準による地方公会計の整備促進について(平成27年1月)」に基づき、財務書類を作成しています。

2. 対象となる会計の範囲

連結財務書類	全体財務書類	一般会計等	一般会計
			国民健康保険事業特別会計
			介護保険事業特別会計
			後期高齢者医療特別会計
			上水道事業会計
			下水道事業会計
			秋田県市町村総合事務組合
			秋田県市町村会館管理組合
			秋田県後期高齢者医療広域連合
			鹿角広域行政組合
			株式会社かづの観光物産公社
			有限会社八幡平地域経営公社
			公益財団法人鹿角市子ども未来事業団
			株式会社かづのパワー

3. 財務書類4表構成の相互関係



- 貸借対照表の資産のうち「現金預金」の金額は、資金収支計算書の本年度末残高に本年度末歳計外現金残高を加えた金額と対応する。
- 貸借対照表の「純資産」の金額は、資産と負債の差額として計算され、純資産変動計算書の期末残高と対応する。
- 行政コスト計算書の「純行政コスト」の金額は、純資産変動計算書に記載される。

4. 財務諸表（財務書類4表）

（1）貸借対照表

貸借対照表とは、基準日時点における財政状態（資産・負債・純資産の残高および内訳）を表示したものです。

■貸借対照表（B／S）の概略図

資産の部（これまで形成した資産）		負債の部（将来世代が負担する金額）	
固定資産	(1) 事業用資産 庁舎、学校、保育所、体育館、公営住宅など	固定負債	(1) 地方債 国や金融機関からの借入金
	(2) インフラ資産 道路、公園、橋梁、上下水道など		(2) 退職手当引当金 将来見込まれる退職金額
	(3) 物品 車両など		(3) その他の固定負債 長期未払金、損失補償等引当金など
	(4) 投資その他の資産 基金、有価証券、出資金など	流動負債	(1) 賞与等引当金 翌年度夏期賞与の当年度負担額
流動資産	(1) 現金預金 現金、預金		(2) その他の流動負債 翌年度償還予定の地方債、預り金など
	(2) 基金、未収金など 財政調整基金、未収金など	純資産の部（現在までの世代が負担した金額）	
		純資産	

資産は本市がこれまでに住民サービス提供のために形成し、今後も住民サービス提供のために利用される財産です。

財産形成に係る財源が地方債等であれば負債に、市税や国・県の補助金等であれば純資産に計上されます。具体的には以下の通りです。

（1）資産

学校、道路など将来の世代に引継ぐ社会資本や、基金など将来現金化が可能な財産

（2）負債

地方債や退職給付引当金など将来の世代の負担となるもの

（3）純資産

過去の世代や国・県が負担した将来返済しなくてよい財源

形成した資産に対して、税収や税金でどの程度賄われたかを示す指標

令和5年度貸借対照表（単位：百万円）

資産の部	一般会計等	全体会計	連結会計	負債の部	一般会計等	全体会計	連結会計
1. 固定資産	59,003	75,707	79,969	1. 固定負債	15,985	30,809	34,130
有形固定資産	54,289	70,344	74,035	地方債	14,442	22,538	25,119
事業用資産	36,714	36,714	39,446	長期未払金	0	0	3
インフラ資産	17,452	32,142	32,142	退職手当引当金	1,544	1,544	2,269
物品	123	1,487	2,447	損失補償等引当金	-	-	-
無形固定資産	47	1,068	1,069	その他	-	6,727	6,739
投資その他の資産	4,668	4,295	4,865	2. 流動負債	2,139	3,231	3,587
2. 流動資産	3,468	5,851	6,368	1年内償還予定			
現金預金	834	2,493	2,852	地方債	2,000	2,802	2,919
未収金	361	467	495	未払金	-	253	382
短期貸付金	2	2	2	未払費用	-	-	6
基金	2,274	2,866	2,973	前受金	-	0	0
棚卸資産	-	25	35	前受収益	-	-	-
その他	-	-	14	賞与等引当金	124	137	227
徴収不能引当金	△3	△3	△3	預り金	15	15	29
3. 繰延資産	-	-	-	その他	-	24	24
				負債合計	18,125	34,040	37,717
				純資産の部			
				純資産合計	44,346	47,517	48,621
資産合計	62,471	81,557	86,338	負債及び純資産合計	62,471	81,557	86,338

※数値は、四捨五入しているため、合計値が一致しない場合があります。

※「-」は金額の計上なし。「0」は百万円未満の計上あり。

これまでに一般会計等においては624億7,100万円の資産を形成してきました。そのうち、純資産である443億4,600万円（71.0%）については、過去の世代や国・県の負担で既に支払いが済んでおり、負債である181億2,500万円（29.0%）については、将来の世代が負担していくことになります。

また、全体会計では資産は815億5,700万円、純資産は475億1,700万円（58.3%）、負債は340億4,000万円（41.7%）となり、連結会計では資産は863億3,800万円、純資産は486億2,100万円（56.3%）、負債は377億1,700万円（43.7%）となります。

（２）行政コスト計算書

行政コスト計算書は、１年間の行政運営コストのうち、福祉サービスやごみ収集にかかる、資産形成につながらない経費などを業務費用として①人件費、②物件費等、③その他の業務費用、業務費用以外の④移転費用に区分して表示したものです。

行政コスト計算書は、企業会計でいう損益計算書にあたるものです。ただし、公会計でいう行政コスト計算書は、損益をみることが目的ではなく、住民が受ける行政サービスのコスト（原価）計算に重点が置かれています。

例えば、官庁会計の歳入歳出決算書では、資産形成に関わる支出も単年度の行政サービスに関わる支出も、その年度のすべての歳入歳出を対象として収支を計算します。

一方で、地方公会計では、普通建設事業費や地方債償還費は資産・負債の増減であり、費用の発生ではないので、行政コスト計算書には計上されません。また、歳入歳出決算書には計上されない減価償却費や退職手当引当金繰入等は、地方公会計では、期間損益の観点から、費用の発生として行政コスト計算書に計上されます。

経常費用から経常収益を差引いた純経常行政コストは、行政サービスの提供にかかったコストから利用者負担を差引いた純粋なコストと言えます。

◆費用：行政サービス提供のために費やしたもの

①人件費

職員給与や議員報酬、退職給付費用（当該年度に退職手当引当金として新たに繰り入れた額）など

②物件費等

備品や消耗品、施設等の維持補修にかかる経費や減価償却費（社会資本の経年劣化等に伴う減少額）など

③その他の業務費用

支払利息、徴収不能引当金繰入額、市債償還の利子など

④移転費用

他会計への支出額、補助金等、社会保障給付など

◆収益：直接サービス提供により住民等がその対価として支払い、自治体が得られるもの

令和 5 年度行政コスト計算書（単位：百万円）

科目	一般会計等	全体会計	連結会計
経常費用（①）	18,679	26,984	35,403
業務費用	11,244	12,871	16,356
人件費	2,331	2,530	3,986
物件費等	8,668	9,866	11,774
その他の業務費用	246	475	596
移転費用	7,435	14,113	19,047
補助金等	4,077	4,293	9,152
社会保障給付	2,189	9,802	9,802
他会計への繰出金	1,151	-	-
その他	19	19	93
経常収益（②）	794	1,881	3,814
使用料及び手数料	108	836	862
その他	686	1,044	2,952
純経常行政コスト（①－②）	17,883	25,104	31,589
臨時損失	468	475	476
臨時利益	11	12	17
純行政コスト	18,339	25,567	32,048

※数値は、四捨五入しているため、合計値が一致しない場合があります。

※「-」は金額の計上なし。「0」は百万円未満の計上あり。

※全体財務書類の他会計への繰出金は内部取引のため相殺消去処理しています。

令和 5 年度の経常費用は一般会計等で186億7,900万円となっています。一方、行政サービス利用に対する対価として住民の方々が負担する使用料や手数料などの経常収益は一般会計等で7億9,400万円となっています。経常費用から経常収益を引いた純経常行政コストは一般会計等で178億8,300万円、臨時損益を加えた純行政コストは183億3,900万円となっています。

また、純行政コストは全体会計では255億6,700万円、連結会計では320億4,800万円となっています。

(3) 純資産変動計算書

純資産変動計算書は、地方公会計制度では純資産の変動を示すものと定義されています。純資産の変動とは、政策形成上の意思決定またはその他の事象による純資産及びその内部構成の変動としています。

純資産の減少は、現役世代が将来世代にとっても利用可能であった資源を費消して便益を享受する一方で、その分の負担が将来世代に先送りされたことを意味します。逆に純資産の増加は、現役世代が自らの負担によって将来世代も利用可能な資源を蓄積したことを意味するため、その分、将来世代の負担は軽減されたこととなります。

このような観点から、純資産の増減は、企業会計における利益及び損失の増減と同様のものと捉えることができます。

(1) 余剰分の計算

①純行政コスト

行政コスト計算書の純行政コストと一致します。

②財源

財源をどのような収入（税収等、国庫補助金）で調達したかを表します。

(2) 固定資産形成分（貸借対照表上の、固定資産＋短期貸付金＋基金（流動資産））

財源を将来世代も利用可能な固定資産、貸付金や基金等にどの程度使ったかを表します。

①固定資産等の変動

当該年度に学校、道路などの社会資本を取得した額と過去に取得した社会資本の経年劣化等に伴う減少額を表します。基金、貸付金、出資金など長期金融資産の当該年度における増加と減少を表します。

②資産評価差額

有価証券等の評価差額を表します。

③無償所管換等

無償で譲渡または取得した固定資産の評価額等を表します。

令和 5 年度純資産変動計算書（単位：百万円）

科目	一般会計等	全体会計	連結会計
前年度末純資産残高	45,687	48,514	49,835
純行政コスト（△）	△18,339	△25,567	△32,048
財源	17,364	24,746	31,257
税収等	13,530	16,766	21,097
国県等補助金	3,834	7,980	10,161
本年度差額	△975	△821	△790
固定資産等の変動（内部変動）	-	-	-
資産評価差額	-	-	-
無償所管換等	0	0	0
他団体出資等分の増加	-	-	-
他団体出資等分の減少	-	-	-
比例連結割合変更に伴う差額	-	-	△284
その他	△365	△176	△176
本年度純資産変動額	△1,340	△997	△1,214
本年度末純資産残高	44,346	47,517	48,621

※数値は、四捨五入しているため、合計値が一致しない場合があります。

※「-」は金額の計上なし。「0」は百万円未満の計上あり。

令和 5 年度の本年度末純資産残高は、一般会計等においては、443億4,600万円となっています。また、全体会計では475億1,700万円、連結会計では486億2,100万円となりました。純資産変動計算書の本年度純資産変動額は、企業会計の利益剰余金の増減にあたるところでもあり、今後の推移を注視する必要があります。

(4) 資金収支計算書

資金収支計算書は、地方公会計制度では、資金収支の状態をみるものと定義されています。資金収支の状態とは、自治体の内部者（首長、議会、補助機関等）の活動による資金の期中取引高を意味します。資金収支計算書は、地方公共団体の資金利用状況及び資金獲得能力を評価する上で有用な財務情報です。

- ① 業務活動収支：行政サービスを行なう中で、毎年度継続的に収入、支出されるもの
- ② 投資活動収支：学校、公園、道路などの資産形成や投資、基金などの収入、支出など
- ③ 財務活動収支：公債、借入金などの収入、支出など

令和5年度資金収支計算書（簡易表示、単位：百万円）

科目	一般会計等	全体会計	連結会計
【業務活動収支】	1,858	2,727	2,899
業務支出	15,388	23,031	31,276
業務費用支出	7,953	8,918	12,246
移転費用支出	7,435	14,113	19,030
業務収入	17,711	26,229	34,644
臨時支出	468	475	478
臨時収入	3	4	9
【投資活動収支】	△1,250	△1,336	△1,413
投資活動支出	2,455	2,821	2,923
投資活動収入	1,206	1,485	1,510
【財務活動収支】	△628	△880	△971
財務活動支出	1,966	2,783	2,873
財務活動収入	1,338	1,903	1,903
本年度資金収支額	△20	510	516
前年度末資金残高	840	1,968	2,328
比例連結割合変更に伴う差額	－	－	△7
本年度末資金残高	820	2,478	2,836

※数値は、四捨五入しているため、合計値が一致しない場合があります。

※「－」は金額の計上なし。「0」は百万円未満の計上あり。

令和5年度の資金収支計算書を見ると、本年度資金収支額は一般会計等で2,000万円のマイナスで、資金残高は8億2,000万円に減少しました。

全体会計では5億1,000万円のプラスで、資金残高は24億7,800万円に増加し、連結会計では5億1,600万円のプラスで、資金残高は28億3,600万円に増加しました。

5. 財務分析（一般会計等）

財務書類や各種資料からの数値を指標に置き換えて分析することで、本市と他自治体を比較し、優れている項目や改善が必要な項目を把握します。

ここでは一般会計等に焦点を当て、主要な指標分析を行います。

経営指標
(1) 純資産比率 (2) 住民一人当たり資産額 (3) 住民一人当たり負債額 (4) 住民一人当たり行政コスト (5) 受益者負担割合 (6) 基礎的財政収支（プライマリーバランス）

(1) 純資産比率

純資産比率は、71.0%となっています。人口平均の74.1%より低い水準です。

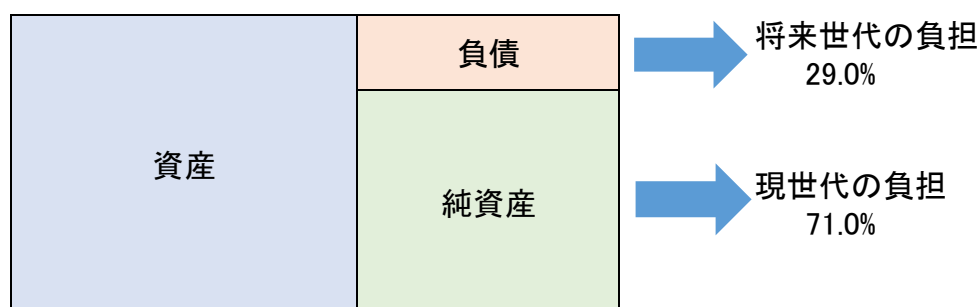
指標名	計算式	鹿角市		前年比	人口 1～3万人未満 (6団体)	都市Ⅰ－Ⅰ (124団体)
		R4年度	R5年度			
純資産比率	$\frac{\text{純資産合計額}}{\text{資産合計額}} \times 100$	71.0%	71.0%	0.0%	74.1%	71.1%

純資産比率について、資産である車を100万円で購入した際の自己資金と借金（ローン）を例に説明します。自己資金を70万円出し、借金を30万円したとすると、この30万円は将来の自分が払っていくことになります。ここでいう自己資金は貸借対照表の純資産であり、借金は負債ということになります。

本市の場合、すべての資産に対し、71.0%が純資産（自己資金）、29.0%が負債（借金）ということになります。しかしながら、資産の老朽化が進めば純資産比率が低下していくことになります。

その意味でも、今後、世代間のバランスを見ながら資産の更新や形成をしていく必要があります。

■純資産比率のイメージ図



(2) 住民一人当たり資産額

指標名	計算式	鹿角市		前年比	人口 1～3万人未満 (6団体)	都市Ⅰ－Ⅰ (124団体)
		R4年度	R5年度			
住民一人当たり資産額	資産合計額÷人口	229万円	228万円	△1万円	235万円	257万円

自治体の資産総額は人口規模によって異なるので、住民一人当たりの数値に置き換えて分析をする必要があります。人口は令和6年3月31日の住民基本台帳の27,417人で算出しています。

鹿角市の「住民一人当たり資産額」は228円で、人口平均の235万円よりも低い水準です。これには鹿角市の行政面積が関係しています。資産が多い場合、それだけ住民の福祉の増進や住民サービスに寄与することになりますが、その一方で資産の大きさに応じて維持補修費などのコストが発生します。

(3) 住民一人当たり負債額

指標名	計算式	鹿角市		前年比	人口 1～3万人未満 (6団体)	都市Ⅰ－Ⅰ (124団体)
		R4年度	R5年度			
住民一人当たり負債額	負債合計額÷人口	66万円	66万円	－	61万円	76万円

住民一人当たりの負債額が適正かどうかを見るには、同じ規模の自治体と比較する必要があります。この数字が低ければ借金等が少なく、財政運営が健全であるといえます。

鹿角市においては66万円で、人口平均の61万円より高い水準です。

(4) 住民一人当たり行政コスト

指標名	計算式	鹿角市		前年比	人口 1～3万人未満 (6団体)	都市Ⅰ－Ⅰ (124団体)
		R4年度	R5年度			
住民一人当たり行政コスト	純行政コスト ÷人口	64万円	67万円	3万円	58万円	59万円

行政コスト計算書で算出される経常的なコストである純行政コストを、住民基本台帳の人口で除して住民一人当たり純行政コストとすることにより、自治体の行政活動の効率性を測定することができます。

鹿角市は67万円と、住民一人当たりのコストは人口平均の58万円より高い水準になっています。

(5) 受益者負担割合

指標名	計算式	鹿角市		前年比	人口 1～3万人未満 (6団体)	都市Ⅰ－Ⅰ (124団体)
		R4年度	R5年度			
受益者負担割合	経常収益 ÷ 経常費用	3.8%	4.3%	0.5%	2.9%	4.0%

受益者負担割合は、行政活動の自律性（受益者負担の水準はどうなっているか）を測定するための指標であり、行政コスト計算における経常収益（使用料・手数料など行政サービスにかかる受益者負担の金額）と経常費用を比較することにより、行政サービスの提供に対する受益者負担の割合を算出することが可能になります。

鹿角市の受益者負担割合は 4.3%で、経常費用を経常収益で賄っている割合は人口平均の 2.9%より高い水準になります。

(6) 基礎的財政収支(プライマリーバランス)

指標名	計算式	鹿角市		前年比	人口 1～3万人未満 (6団体)	都市Ⅰ－Ⅰ (124団体)
		R4年度	R5年度			
基礎的財政収支 (プライマリーバランス)	業務活動収支(支払利息支出を除く) +投資活動収支 (基金積立支出及び基金取崩収入を除く)	12億11百万円	11億47百万円	△63百万円	8億23百万円	10億60百万円

基礎的財政収支(プライマリーバランス)は、地方債等の支払利息を除いた業務活動収支と、基金の積立及び取崩を除いた投資活動収支の合計であり、当期における税金や地方交付税などの収入で行政サービスに係るコストを賄っているかを表します。鹿角市の基礎的財政収支(プライマリーバランス)は 11.47 億円で、人口平均値より高い水準であり、政策的経費を税金等で賄っていることになります。